

実践報告

保育士・教員養成課程を設置するマージナル大学における
卒業論文を中心とするゼミ活動の教育効果と要件の検討太 田 英 樹¹⁾An Examination of the Educational Effects and Requirements of Seminar Activities
Focused on Graduation Theses at “a Marginal University” That Trains Childcare
Workers and School Teachers

Hideki Ota

要 約

本研究の目的は、ノンエリート層が学ぶマージナル大学における学びの意識を明らかにし、卒業論文を中心とするゼミ活動の教育効果と要件の検討にある。保育士・教員養成に取り組むA大学生調査協力者9名に対する半構造化面接から、過去の学びの実態には「学習に対する向上心の記憶群」と「学習に対する強い苦手意識の記憶群」があり、いずれも過去の学びにつまずきがあることが明らかになった。卒業論文を中心とするゼミ活動の教育効果として、「将来に視点の転換を促し、自ら行動し成長しようとする学びの実行と、これを就労後も継続しようとする意識の向上」が明らかになった。この実現には①目標の共有と協働が実現できるゼミの風土形成、②学生のキャリア形成を重視した卒業論文のテーマ設定、③将来を念頭に実態に即した個別指導を行うゼミ教員が重要な要件と考えられた。主体的に学び続ける人材育成と輩出は、社会に対するマージナル大学の重要な役割と考えられた。

キーワード：マージナル大学、過去の学びに対する意識、卒業論文を中心とするゼミ活動、教育効果と要件、主体的に学び続ける人材の育成

1 問題と目的

近年の急速な少子化の影響により、大学のあり方が問われている^{24) 25) 44)}。我が国の2024年度における四年制大学は813大学、このうち624大学(76.8%)は私立大学であった²²⁾。私立大学は、広く学びの受け皿となる役割を果たしているが²⁷⁾、定員割れなど厳しい状況に直面している²⁹⁾。

大学への進学率には地域格差があるが、全国平均ではすでに同世代人口の過半数以上を示している²³⁾。このうち比較的入学しやすい大学では、学生の多様化が顕著との報告がある⁴⁾。学生の多様化をめぐっては、社会情勢や答申等を受け²⁶⁾、大学側も推進してきた側面がある⁴⁰⁾。この多様化には、大学をめぐる歴史的経緯³⁴⁾や、障害学生支援に関する課題¹⁵⁾もあり、実践的模索が続いている^{11) 41)}。

1) 太田 英樹 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) ota-hideki@tokyomirai.jp

居神⁸⁾は、伝統的な大学像を「中心」とするならば、その「周辺」に位置する大学を「マージナル大学」とし、「受験学習をまったく経験せずに選ばれてしまったノンエリート層を多く吸収する大学」と定義した。そして、その実態を「学生の多様化の度合いが大きな大学」と述べ、「彼らが少しでも多く社会からの承認を受けるような仕事につくため、マージナル大学の教員はどのような教育的貢献ができるのか」とし、マージナル大学が果たすべき役割を提起している。マージナル大学に学ぶノンエリート層の学生もいずれ社会の中で労働力となり、自己実現や社会貢献に努力することが期待される¹⁶⁾。マージナル大学での教育は、キャリア教育としてもその質が問われていると考えられた^{1) 38) 39)}。

他方、大学における代表的な学びの場として、ゼミナール専門教育（以下、ゼミ）がある。ゼミで取り組まれる演習活動（以下、ゼミ活動）は、同じ目的意識を共有した学生が比較的少人数で集まり、視野を広げ、専門的知見を高め合うことが期待される³⁰⁾。ゼミ活動をめぐっては、すでに様々な研究がなされているが^{14) 17)}、ゼミを担当する教員（以下、ゼミ教員）の指導のもとで取り組まれる卒業論文は特に重視されてきた⁵⁾。マージナル大学では、その実態から理解別教育を推進すべきとの指摘もあり⁴²⁾、少人数や個別指導を主とする卒業論文作成は、個々の学生の実態に合わせることができると教育方法の一つと考えられた^{10) 32) 33)}。

大学での学びには、①知識や手段に関する能力の習得、②自らデータを集め分析し考え、問題を解決しようとする能力の習得、の大きく2つの目的があるとされる。この2つは双方を一体として取り組むべき課題であるが、とりわけ②に対する取り組みでは、読み手と社会を強く意識する必要がある。近年、実務重視などの観点から卒業論文の作成を必須としない大学も存在する。しかしながら卒業論文の作成は、社会において必要な「自ら調べ考え」「書き」「伝えようとする力」の育成には有益な取り組みと考えられた³⁶⁾。

だが、マージナル大学の学生は、これまでの経験から学ぶことに対する苦手意識を抱えていることも予想される。そのため、卒業論文を中心とするゼミ活動が教育効果を生むためには、いくつか要件を満たすことが重要と考えられた。

そこで本研究では、まずマージナル大学の学生による過去の学びに対する意識を明らかにする。その上で、卒業論文作成を中心とするゼミ活動における成長の実感から、この教育効果を検討する。さらに、教育効果を高めるための要件についても考察を行う。

2 方 法

(1) 対象

1) A大学について

A大学は、都市部に2学部を有し、通学課程と通信課程を設置する私立大学であった。通学課程における202X年の学生数は、約1500名であった。2学部のうちの1学部では2つの専攻に分かれ、保育・教育を主とする養成課程が設置されていた。調査協力者全員は、ここに該当していた。

なお本研究では、先行研究を参考にマージナル大学を「比較的入学しやすく、ノンエリート層の学生が多く学ぶ大学」と定義した。偏差値や入試状況等から、A大学は概ねこれに該当すると考えられた。

2) 調査協力者が所属するゼミの概要

A大学では、3年次よりゼミに所属し、より専門的な学びに取り組んでいた。ゼミはA大学の学事暦に従い、前期・後期それぞれ1コマ100分を14回、年間28回実施していた。3年次は、「こども保育・教育演習Ⅰ」「Ⅱ」、4年次は「卒業研究・卒業論文（以下、卒業論文）」の授業名であった。筆者のゼミは、特別支援教育を専門に学ぶゼミであり、体験等も取り入れた多様な活動に取り組んでいた。調査協力者は、全員がこのゼミの所属であり、筆者はその担当教員であった。

表1に、202X年－1年度から202X年度にかけて調査協力者が所属したゼミ活動の概要を示した。ゼミ

表1 202X－1年度から202X年度にかけてのゼミ活動の概要

学年	時期	主なゼミ活動						その他の活動				
		活動名	活動の概要	個別の論文指導	ゼミにおける育成目標			進路との関連	保育	教育	進路など	
					協働力	調べ考える力	書き伝える力					
2	202X－2年度								保育実習①	教育実習（幼稚園）		
202X－1 年度 前半		自己紹介プレゼン	ひとり5分で、自分のことを紹介する。		○		○				教員採用試験（3年次受験）	
		新聞記事研究	新聞記事の読み取りと分析方法を学ぶ。			○						
		少人数プレゼン	3人程度で障害について調べ、発表する。		○	○	○					
		文献プレゼン	ひとり5分で、文献のプレゼンを行う。			○	○					
		PC講座	4年生を講師にPC操作能力の向上を図る。				○					
		外部講師講話	ゼミ卒業生による講話。		○	○	○	○				
		ワークショップ	3人程度で協働し、ワークショップを行う。		○	○	○					
		インクルーシブスポーツ	他ゼミと協働したスポーツ大会を実施。		◎							
3		3年4年情報交換会	縦の交流を促進し情報交換を行う。		○			○	保育実習②			
	卒業論文中間報告会	会の運営と、4年生の発表を聞く。		◎	◎	◎						
	自治体研究	居住自治体の子育て支援等の研究。			◎	◎	◎					
202X－1 年度 後半		現地調査演習	障害者施設を見学し結果を考察する。		◎	◎	◎	◎		介護等体験（小学校）		
		インタビュー調査演習	2人1組でインタビューを経験する。		◎	◎	◎	◎				
		視覚障害体験	視覚を遮り白杖を使って体験を行う。		○	○						
		インクルーシブスポーツ	他ゼミと協働したスポーツ大会を実施。		◎							
		卒業論文発表会	会の運営と、4年生の発表を聞く。		◎	◎	◎	◎				
202X年度 前半		3年4年情報交換会	縦の交流を促進し情報交換を行う。		○			○	保育実習③	教育実習（小学校）	教員採用試験（4年次受験）	
		【研究1】現地調査	関係機関に対する現地調査を行う。		◎	◎	◎	◎				
		外部講師講話	外部講師による講話。	◎	○			◎				
		インクルーシブスポーツ	他ゼミと協働したスポーツ大会を実施。		◎				教育実習（幼稚園）	公務員試験（1次）		
		【研究2】共同研究	小グループで関係機関に共同調査を行う。		◎	◎	◎	◎				
4		卒業論文中間報告会	卒論の進行状況を報告する。		◎	◎	◎	◎				
202X年度 後半		【研究3】インタビュー調査	学外の関係者にインタビューを行う。		◎	◎	◎	◎			公務員試験（2次）	
		抄録の作成	抄録の作成を行う。	◎	◎	◎	◎	○				
		卒業論文発表会	副査に対して成果を発表する。		◎	◎	◎	◎				
		教員採用試験・公務員試験引継ぎ会	4年から3年に試験対策の引継ぎを行う。		◎	◎	◎	◎				

*主なゼミ活動のねらい及び進路との関連では、卒業論文と特に直結する部分は◎で示した。

*個別の論文指導の回数は、表2調査協力者の概要に示した。

ミ活動は、3年次において基礎から開始され、4年次は卒業論文作成に取り組んでいた。ゼミ活動を通じて①協働力、②調べ考える力、③書き伝える力、の3つを育成目標として設定していた。なお、本研究では高校までの学びを「学習」、大学の学びを「学修」とし、区別して表記することとした。

3) 調査協力者の概要

表2に、調査協力者の概要を示した。調査協力者は、4年生9名であった。調査協力者全員が、保育・教育・福祉分野で進路を希望しており、これに必要な資格や免許の取得を目指していた。これを前提に、キャリア教育重視の観点から卒業後の進路と関連の深い卒業論文のテーマを設定し、調査活動を行うこととしていた。調査協力者の卒業後の進路は、公立小学校教諭が3、公立保育士が2、福祉施設が4であった。

調査協力者は、前掲の育成目標とキャリア教育を踏まえ、4年次を中心に3つの調査活動に取り組んでいた。研究1は、進路と関連の深い関係諸機関に対する現地調査を行い、視野を広げることを目的とした調査活動であった。例えば、調査協力者Eは障害児者のファッションをテーマとし、病院内に設置された医療用ウィッグ相談室に調査を行った。調査協力者Iは、児童養護施設に進路希望があり、退所後の支援が社会的な課題となっていたことから、これを支援するNPO法人に調査を行った。研究2は、ゼミ生が協働し、小グループに分かれて調査を行う共同研究であった。調査先は、ユニバーサル・シアターと発達障害当事者が運営する居場所カフェであった。どちらも設立の理念や活動の実態を調査した。研究3は、調査協力者の進路と関係の深い人物に対するインタビュー調査であった。例えば、調査協力者Fは公立保育士が進路希望であったため、ベテランの公立保育士に対してインタビュー調査を行った。

調査協力者全員は、個々の調査活動の成果を自己アピール等の就職活動に反映させることとした。また、調査の手順や時期等についてはゼミ内でマニュアル化を図り、調査協力者間で共有しやすい可視化

を図っていた。その上でゼミ教員は、1人平均16回、ゼミ全体では年間146回の個別の論文指導を行っていた。これらの工夫は、特別支援教育の個に応じた指導の手法を参考としていた。

(2) 手続き

調査協力者に対して半構造化面接を行った。インタビューは、スマートフォンのボイスメモ機能を使って録音した。調査時間の平均は21分、合計の調査時間は192分であった。表3に、調査協力者に対する質問項目を示した。質問項目は、計6項目であった。なお質問項目の作成にあたっては、先行研究³⁾を参考とした。

(3) 調査期間

202X年12月から202X+1年1月にかけて行った。なお調査は、調査協力者の卒業論文及び抄録の作成が終わった後に実施した。

3 倫理的配慮

調査協力者に対しては、①本研究の目的、②個人情報保護、③インタビュー拒否に関する配慮、など研究倫理に関する説明を口頭と書面で行い、全員より同意を得た。また、卒業論文題目と大まかな進路先についての掲載許可も得た。

4 分析処理

分析処理は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA: Modified Grounded Theory Approach）を参考に行った。M-GTAは、①人間と人間が直接的にやりとりする社会相互作用、②ヒューマンサービスの領域、③研究対象とする現象がプロセス的性格、の3点を満たす質的研究に適している¹²⁾。そのためM-GTAは、本研究の目的に適した研究方法であった。なお、分析処理はインターネットの接続がないPCを使用し行った。

本研究の分析者は、筆者であった。筆者自身が運営するゼミの教育効果を測定することは、客観性及び厳密性の担保に関する課題が考えられた。しかし、他に調査協力者の学びのプロセスに関わっている者

表2 調査協力者の概要

NO.	調査協力者	卒業論文作成の時期と調査活動（202X年）					取得した資格・免許			調査協力者の進路	記憶に基づく群		調査時間（分）
		1月	5月	8月	10月	通年	保育士	幼稚園教諭	小学校教諭		向上	苦手	
		卒業論文 題目の決定	研究1 （現地調査先）	研究2 （共同研究） ユニバーサル シアター	研究3 （インタビュー 対象者） 発達障害者 当事者カフェ	個別論文指導 （回数）							
1	B	特別な教育的ニーズの子どもに対する理解と支援の検討ー外国にルーツをもつ子どもを中心にー	NPO法人子ども食堂	○	NPO法人日本語教室主宰者	15		○	○	公立小学校教諭	○		19
2	C	発達障害児に対する理解と支援ー小学校期におけるユニバーサルデザインを取り入れた実践の検討ー	民間障害児学習支援機関	○	公立小学校教諭	15		○	○	公立小学校教諭	○		17
3	D	小学校期における発達障害児に対する理解と支援の検討	障害児対応保育園・発達支援事業所	/	公立小学校教諭	20		○	○	公立小学校教諭		○	31
4	E	自分らしく生きるためのファッション論ー子ども達にどう伝えるかー	病院内医療用ウィッグ相談室		身体障害のある当事者	18		○	○	放課後等デイサービス職員	○		21
5	F	発達障害児に対する理解とインクルーシブ保育の検討	公立児童発達支援センター		公立保育士	15	○	○		公立保育士		○	23
6	G	気になる子に対する理解と支援ーのびのびと育ちあう集団作りの検討ー	公立児童発達支援センター	○	公立保育士	18	○	○		公立保育士		○	20
7	H	児童養護施設に対する理解と支援の検討ー自分には何ができるのかー	社会福祉法人児童養護施設	○	児童養護施設出身当事者	15	○	○		児童養護施設職員		○	22
8	I	児童養護施設退所後を見据えた支援の検討	NPO法人若者支援機関	○	児童養護施設職員	15	○			児童養護施設職員	○		18
9	J	児童養護施設における発達障害児の支援の検討ー施設保育士として何ができるかー	公立子ども家庭支援センター	○	児童養護施設職員	15	○	○		児童養護施設職員		○	21

* 平均調査時間は21分、合計192分であった。
 * 個別の論文指導は、202X年1月から202X+1年1月までの実施回数、平均で約16回、合計146回であった。
 * 研究2「共同研究」は学生の希望により2つの小グループとし、協働で調査活動を行った。

表3 インタビュー調査における質問項目

NO.	事項	質問項目
1	基本事項	取得予定の主な資格や免許を教えてください。
2		進路先について教えてください。
3		卒業論文のテーマを教えてください。
4	質問事項	大学に入学するまで、学びに対してどのような感情を抱いていましたか。
5		ゼミにおける卒業論文を中心とする学びについて、感じていることを教えてください。
6		ゼミにおける卒業論文を中心とする学びとこれからの進路について、感じていることを教えてください。

が見当たらないことから、筆者が分析を行うこととした。

(1) 分析1

まず、調査協力者ごとの逐語記録を作成した。第2に、逐語記録を熟読し、語りのまとまり部分に注目しながら、これを調査協力者ごとのワークシートに整理した。第3に、調査協力者ごとの語りのまとまりのワークシートから、主として質問項目4における共通する語りのまとまり部分に着目し、これをまとまりごとにワークシートに整理した。第4に、整理されたワークシートをもとに、9名の調査協力者を2つの群に分類した。第5に、2つの群における語りを読み込み、この定義を生成した。第6に、群分類された調査協力者の語りの内容を、4つの時期の記憶として整理した。第7に、群ごとの学習の語りを読み込み、これをもとにカテゴリーを生成した。第8に、全体について語りの内容と整理に誤りがないことを確認した。最後に、これを表としてまとめた。

(2) 分析2

質問項目5及び6を中心に、調査協力者ごとの逐語記録とワークシートを確認した。第2に、調査協力者ごとの学修に関する語りのまとまりから、共通する語りのまとまり部分に着目し、ワークシートに整理した。第3に、まとまりごとのワークシートを読み込み、概念とその定義を生成した。第4に、生成された概念ごとの語り数、発言者数を確認した。第5に、概念ごとの代表的な語りを抽出した。第6に、概念ごとの関連性に着目し、カテゴリーを生成し、表としてまとめた。最後に、学びの記憶を概念図としてまとめた。

5 結 果

(1) 分析1：大学入学前の学習に対する記憶をもとにした群間比較

分析1の結果から、「学習に対する向上心の記憶群（以下、向上群）」と、「学習に対する強い苦手意識の記憶群（以下、苦手群）」が生成された。向上群は「学習に対して強い向上心があったものの、部

活動等の理由により学習の中断を経験した学生」、苦手群は「小学校期より学習に対して強い苦手意識と自らの学力の低さを実感した学生」と定義することとした。調査協力者のうち、向上群が4人、苦手群が5人であった。

表4に、分析1の群間比較を示した。時期により全体で4区分であった。語りのまとまりから、カテゴリーを群ごとに生成した。語り数は、向上群69、苦手群109、合計178であった。特に重要と考えた語りには下線を引いた。なお、カテゴリーは『』と表記した。

第1は、小学校期であった。向上群の語り数は9、発言者数は4であった。『学校での学習に対する意欲とさらに向上させようとする意識の高まり』が生成された。苦手群の語り数は43、発言者数は5であった。『学校での学習に対する苦手意識の芽生え』が生成された。第2は、中学校期であった。向上群の語り数は19、発言者数は3であった。『部活動による時間的制約と学習の中断』が生成された。苦手群の語り数は16、発言者数は5であった。『学校での学習に対する強い苦手意識の高まりと遅れの実感』が生成された。第3は、高校期であった。向上群の語り数は20、発言者数は3であった。『部活動と学習の両立に対する試行錯誤』が生成された。苦手群の語り数は34、発言者数は4であった。『高校入学後も続いた学力不振と部活動等による時間的制約』が生成された。第4は、大学選択期であった。向上群の語り数は21、発言者数は4であった。『大学選択期にすでに抱いていた将来に対する具体的目標』が生成された。苦手群の語り数は16、発言者数は4であった。『将来の職業に対する希望と、免許・資格等取得に基づく大学選択』が生成された。

(2) 分析2：大学入学後の学びの実感

表5に、分析2大学入学後の学びの実感を示した。全体で206の語りの抽出、11の概念とその定義を生成した。これをもとに、4のカテゴリーを生成した。代表的な語りで、特に重要と考えた部分には下線を引いた。以下、〈〉は概念、その定義は《》と表記

表4 分析1 大学入学前の学習に対する記憶をもとにした群間比較

群（人数）		学習に対する向上心の記憶群（4）				学習に対する強い苦手意識の記憶群（5）					
定義		学習に対して強い向上心があったものの、部活動等の理由により学習の中断を経験した学生				小学校期より学習に対して強い苦手意識と自らの学力の低さを実感した学生					
NO.	時期	カテゴリー	代表的な語り（発言者）		語り数	発言者数	カテゴリー	代表的な語り（発言者）		語り数	発言者数
1	小学校期	学校での学習に対する意欲とさらに向上させようとする意識の高まり	・漢字ドリルとか計算ドリルとか、そういうのを誰よりもやるっていうのを決めてて、負けず嫌いなので。（B） ・知らないとい何にもわからないままだけど、知ったらいろんな考え方とか可能性が広がって。（C） ・苦手意識、そうですね、あんまりなかったですね、なんか、算数数学とかは好きでやっていましたね。（I） ・やっぱり数学が自分は得意で、先生とかもいい先生で、数学は好んでやっていました。（I）		9	4	学校での学習に対する苦手意識の芽生え	・（苦手意識の）最初は、たぶん小学校2年生の掛け算。（F） ・（勉強できないのは）つらいです。（G） ・苦手でした。勉強に苦手意識がついたのは、小学校3～4年生・・・（H） ・（勉強は）苦手なものと捉えていました。小学校からです。（J）		43	5
2	中学校期	部活動による時間的制約と学習の中断	・中学校に行って落ちこぼれました笑。きっかけは特にないけど、難しすぎて何言ってるか解んなくて。（B） ・そうですね、勉強すればするほど、いいことがあるな、と思って。（C） ・（勉強が）出来る方って思っていたんですけど、部活で、朝練もあるし、夕方も・・・もう。（E） ・勉強できなくはないけど、優先したいことがあるから、時間が必然的に短くなる、勉強する時間が。（E）		19	3	学校での学習に対する強い苦手意識の高まりと遅れの実感	・（勉強は）わかんないし、寝ちゃうし。だめ、できないです。（D） ・座っているのも苦痛。自分からしたら、訳が分からないことをずっと先生が話しているだけだったので。（H） ・そうです。毎日苦痛でしたね、本当に。（H） ・中学生の時にもっとちゃんと勉強してたら、と思うこともあるし。（G）		16	5
3	高校期	部活動と学習の両立に対する試行錯誤	・嫌いじゃないです。ただ、やらないと本当にどん底まで行って、両方経験しました。嫌いではないです。（B） ・（勉強は）なんか、ついていけなくなると面白くなる。（C） ・担任から連絡があると部活に支障が出るので、足かせにならない程度には頑張っていました。（E） ・予習復習していないからわかんないです。だから、テスト期間とかはやるけど。（E）		20	3	高校入学後も続いた学力不振と部活動等による時間的制限	・中高一貫だったんです。それもまた（高校入試では）勉強しないでいいので。（D） ・（勉強は）嫌いでした。あはは、本当に勉強やだな、って思ってた。得意じゃないです、もう・・・（G） ・えー、そう・・・難しい。問題を解いていても、もうわからないみたいなの、感じてた。（G） ・（高校は）県立です。そう、部活しに行きました。（J）		34	4
4	大学選択期	大学選択期にすでに抱いていた将来に対する具体的な目標	・もともと小学校の先生になりたくて、で、オープンキャンパス、お姉ちゃんが通信通っていて。（B） ・えっと、AO（入試）です。この大学は、もともと小学校の先生になりたい、という気持ちが強くて。（C） ・幼稚園か小学校で迷っていたんですよ。で、どっちも取れるところないかな、と探して。（E） ・ああ、けど、大学入って、その、児童養護施設入ろうかな、と結構早い段階で決めていて。（I）		21	4	将来の職業に対する希望と免許・資格等取得に基づく大学選択	・（大学入試は）公募推薦です。（F） ・幼稚園と保育士の資格がとれる4年生の大学っていうのは、もう、はい、それで決めました。（F） ・（大学入試は）そうですね指定校推薦です。いや、本当に、いろんなめぐりあわせで。（H） ・（大学入試の時点で資格取得希望は）ありました、児童養護で働くっていうのも、思っていました。（J）		16	4
計		4	語り数		69		4	語り数合計		109	
		発言者数（延べ人数）		向上群	14			語り数合計		178	
								苦手群			18

*特に重要と考えた部分には下線を引いた。

表5－（１） 分析２ 大学入学後の学びの実感

NO.	カテゴリー	概念	概念の定義	代表的な語り（発言者）	語り数	群ごとの語り数（発言者数）		発言者数
						向上	苦手	
1	入学時に抱いた大学教育に対する期待と失望	①大学での学修に対する期待	これまでとは違った学びが大学で実現できるのではないか、という期待の高まりのこと。	・（勉強の苦手意識は） <u>続いていますね、でも単位を落としては、というのがあるので、そこは頑張ってやりますけど。</u> （D） ・（入学後の目標は） <u>それに向かって頑張るじゃないですけど、資格のためにまず単位をしっかりと取る。成績はAとかSとかを狙うというのは、目標はあって。</u> （I）	20	7 (3)	13 (5)	8
		②新型コロナウイルス感染症によるダメージ	新型コロナウイルス感染症の影響によって大学生活が保障されない悔しさと、人と対面で繋がることが出来ない学修の中断のこと。	・（大学生活のイメージが） <u>違いましたね、自分たちが1年生のときは、本当にコロナ全盛期みたいな感じだったので、最初の半年はずっとオンラインだったんですよ。</u> （H） ・（大学入学後は） <u>最初ギリギリ、オンラインで、全然頭に入らなかった。なんか、もったいなかったな、と思いました。</u> （J）	15	8 (3)	7 (4)	7
		小計	2		35	15 (6)	20 (9)	15
2	ゼミという新たな学修の場との出会い	③これまでとは違ったゼミ活動という学び	同じ分野の学問を追求するゼミという初めての学修の場との出会いと、これに対する期待の高まりのこと。	・ゼミに入ってから <u>の学びは、今考えると、やってよかった、学んでよかったな、しかないんですけど、逆にゼミで学んでいなかったら、今の自分はこうなっているんだろう、と、なんか、恐怖を感じていて、そのぐらい、考えを深められた、という感じです。</u> （C） ・それに対して、ゼミは <u>自分で行動しないと成長も出来ないし、自分でやるから、いろんな学びっていうか、いろいろ成長することが出来る、うん、いや、ゼミの記憶しかないですね。</u> （I）	9	5 (3)	4 (2)	5
		④ゼミ教員との出会いと交流	研究室に所属しゼミ教員に直接的指導を受けるという初めての学修と、これに伴う心の交流のこと。	・自分は、その楽しさっていうと、 <u>その先生と、なんかだんだん仲良くなっていくじゃないですけど。</u> （I） ・この文章にしたら、先生、おっと言ってくれるかな、とか、自分のにははまって、それがちょっと嬉しくて、文章の言い回しとか、自分で聞いて、調べられるようになった。（J）	13	5 (2)	8 (3)	5
		⑤ゼミ仲間との出会いと交流	同じ学問を追求するという、初めて出会う学修を通じた仲間との繋がり信頼関係構築の実感のこと。	・やばい <u>遅れてるってなって、そうするとまた出来ない自分が出てきちゃって、落ち着かないですねかなり。</u> （D） ・あはは、卒論つらかったあ、けど絶対 <u>否定しないじゃないですかゼミの中では、そういう意見もあるよねみたいなの、そういうのが初めてだったから。</u> （F）	11	2 (2)	9 (3)	5
		小計	3	33	12 (7)	21 (8)	15	

*特に重要な部分には下線を引いた。

表5－（2） 分析2 大学入学後の学びの実感

NO.	カテゴリー	概念	概念の定義	代表的な語り（発言者）	語り数	群ごとの語り数（発言者数）		発言者数
						向上	苦手	
3	卒業論文を通して学ぶ醍醐味と自己の成長の実感	⑥調査し事実に基づいて書く経験	アウエーを訪問して地域の人と対話し、知りたいことを引き出し、まとめる初めての体験をすること。	・一番印象に残っているのは、最後のインタビュー調査です。小学校の現場の先生に話を聞いて、もう、現場ってこんななんだ、っていうか、全然知らなかった。（C） ・（調査は）いい出会いもあるし、自分の考えたこういう感じって思っていた部分がある、もう一個上の答えが返ってきたりとか、そっちのほうが、自分の新しい気づきが、学びになって。（E）	33	19 (4)	14 (4)	8
		⑦専門性への入り口	特別支援教育に関する専門的な知見に続く、専門職の入口に立つこと。	・どんどん専門知識を深めるような学びだったから、その、自分に興味がある分野だったから、すごい学びやすかったというか、そういうのもあって。（G） ・ああ、そうですね、やっぱりその、ゼミで卒業論文で目標あるので、それに向かって頑張ることができるから、それがやっぱりいいですね。（I）	11	7 (3)	4 (3)	6
		⑧自分を成長させる努力	地域で人と出会い、調べ、考え、書くという経験が生み出す自分で自分の視野を広げようとする努力のこと。	・でも、やっぱり自分から動かないと何も来ないな、というのを感じたし、働いた後も自分から動かないと何も得られないな、というのがわかったな、と思います。（B） ・本当に興味があることは突き詰めていきたいタイプだと思っているので、うん興味があったから、どんどん学んでいきたいというので、意欲が続いたのかなと思います。（G）	17	5 (2)	12 (4)	6
		⑨自分が成長している実感	卒業論文を通して学びの深まりと共に、自らの成長を実感し、学ぶ喜びを知ること。	・なんか自分から学ぶことって、いいな、と思いました。なんか楽しかった。成長しているなって思いました。学んでそれが自分の知識になっている実感があるから。（G） ・卒業論文の内容とかも面接とかで聞かれたし、やっぱり今までの学びが繋がってきてるんだな、というのをすごく感じて、公務員試験に合格した時も、もう泣いて、達成感がすごくて。（G）	25	9 (4)	16 (5)	9
		小計	4		86	40 (13)	46 (16)	29
4	キャリア教育としての卒業論文	⑩進路に繋がる学修の実現	卒業論文が踏み台となり、これからのキャリア形成の入り口に立つこと。	・卒論を見返してみても、先行研究で調べた機関とかは、もう現場で使えるというか、現場で直接使えるし、もし実際が違って、そういうのがあるというのが解っているから。（C） ・スタート地点になったと思います。頑張る素地を作ったというか。（D）	28	14 (4)	14 (4)	8
		⑪卒業後も学び続ける基盤の形成	大学卒業後、社会の中で継続的にさらに学び続け、自分の可能性を追求しようとする意識の高まりのこと。	・これからも学び続けなきゃいけないし、公立って研修とかもある。だからその研修も含め、先輩保育士が働いているところなんかも目に焼き付けて、いろんなことを学んでいきたい。（G） ・なんか考えを入れる前に作れたというか、土台を作れたから、じゃあこういう支援をやりたいんですよっていうのを、たぶん現場に入ったらもっと見えてくるんだろうな、って思えるし。（J）	24	10 (4)	14 (5)	9
小計		2		52	24 (8)	28 (9)	17	
計	4	11		語り数 向上群 発言者数（延べ人数） 苦手群	206 34 42	91 34	115 42	76

*特に重要な部分には下線を引いた。

した。

1) 入学時に抱いた大学教育に対する期待と失望

語りのまとまりから〈大学での学修に対する期待〉は、《これまでとは違った学びが大学で実現できるのではないか、という期待の高まりのこと》と定義した。〈新型コロナウイルス感染症によるダメージ〉は、《新型コロナウイルス感染症の影響によって大学生活が保障されない悔しさと、人と対面で繋がること出来ない学修の中断のこと》と定義した。この2概念から『入学時に抱いた大学教育に対する期待と失望』が生成された。該当した語り数は35であった。

2) ゼミという新たな学修の場との出会い

語りのまとまりから〈これまでとは違ったゼミ活動という学び〉は、《同じ分野の学問を追求するゼミという初めての学修の場との出会いと、これに対する期待の高まりのこと》と定義した。〈ゼミ教員との出会いと交流〉は、《研究室に所属しゼミ教員に直接的指導を受けるという初めての学修と、これに伴う心の交流のこと》と定義した。〈ゼミ仲間との出会いと交流〉は、《同じ学問を追求するという、初めて出会う学修を通した仲間との繋がり信頼関係構築の実感のこと》と定義した。この3概念から『ゼミという新たな学修の場との出会い』が生成された。該当した語り数は33であった。

3) 卒業論文を通した学ぶ醍醐味と自己の成長の実感

語りのまとまりから〈調査し事実に基づいて書く経験〉は、《アウェーを訪問して地域の人と対話し、知りたいことを引き出し、まとめる初めての体験をすること》と定義した。〈専門性への入り口〉は、《特別支援教育に関する専門的な知見に続く、専門職の入口に立つこと》と定義した。〈自分を成長させる努力〉は、《地域で人と出会い、調べ、考え、書くという経験が生み出す自分で自分の視野を広げようとする努力のこと》と定義した。〈自分が成長している実感〉は、《卒業論文を通した学びの深まりと共に、自らの成長を実感し、学ぶ喜びを知ること》と定義した。この4概念から『卒業論文を通した学ぶ醍醐味と自

己の成長の実感』が生成された。該当した語り数は86であった。

4) キャリア教育としての卒業論文

語りのまとまりから〈進路に繋がる学修の実現〉は、《卒業論文が踏み台となり、これからのキャリア形成の入り口に立つこと》と定義した。〈卒業後も学び続ける基盤の形成〉は、《大学卒業後、社会の中で継続的にさらに学び続け、自分の可能性を追求しようとする意識の高まりのこと》と定義した。この2概念から『キャリア教育としての卒業論文』が生成された。該当した語り数は52であった。

(3) 概念図

図1に、分析結果を踏まえた概念図を示した。過去の学びの記憶は分析1の4区分、大学での学びの実感分析2の4区分にそれぞれ対応させた。語り数は()で示した。

調査協力者は「学びに対する向上心の記憶群」と「学びに対する強い苦手意識群」に分類される。この2つの群は、大学選択期において共通の強い関心を抱き、自己実現として保育士資格や教員免許取得を目標とし、マージナル大学への入学を決めた。入学後は、コロナ禍が影響し、期待と失望が入り混じる感情を抱き、大学生活前半を過ごしていた。3年次より希望する特別支援教育を専門とするゼミに所属し、『ゼミという新しい学びの場との出会い』が起こった。複数の概念が、ゼミ活動において学びの循環を形成していた。この学びの循環を足掛かりに、進路希望と卒業論文のテーマを一致させ、『卒業論文を通した学びの醍醐味と自己の成長の実感』につながった。これが自己実現と社会貢献を視野に入れた『キャリア教育としての卒業論文』となり、主体的な社会参加への足掛かりを得た。

本研究においては、調査協力者の語りを足掛かりに、群間比較、概念とカテゴリーの生成、概念図、とデータ分析に取り組んだ。このことから、調査協力者が所属するゼミで生じた学びに関する分析結果は「理論的飽和化」に到達したと考えられた¹³⁾。

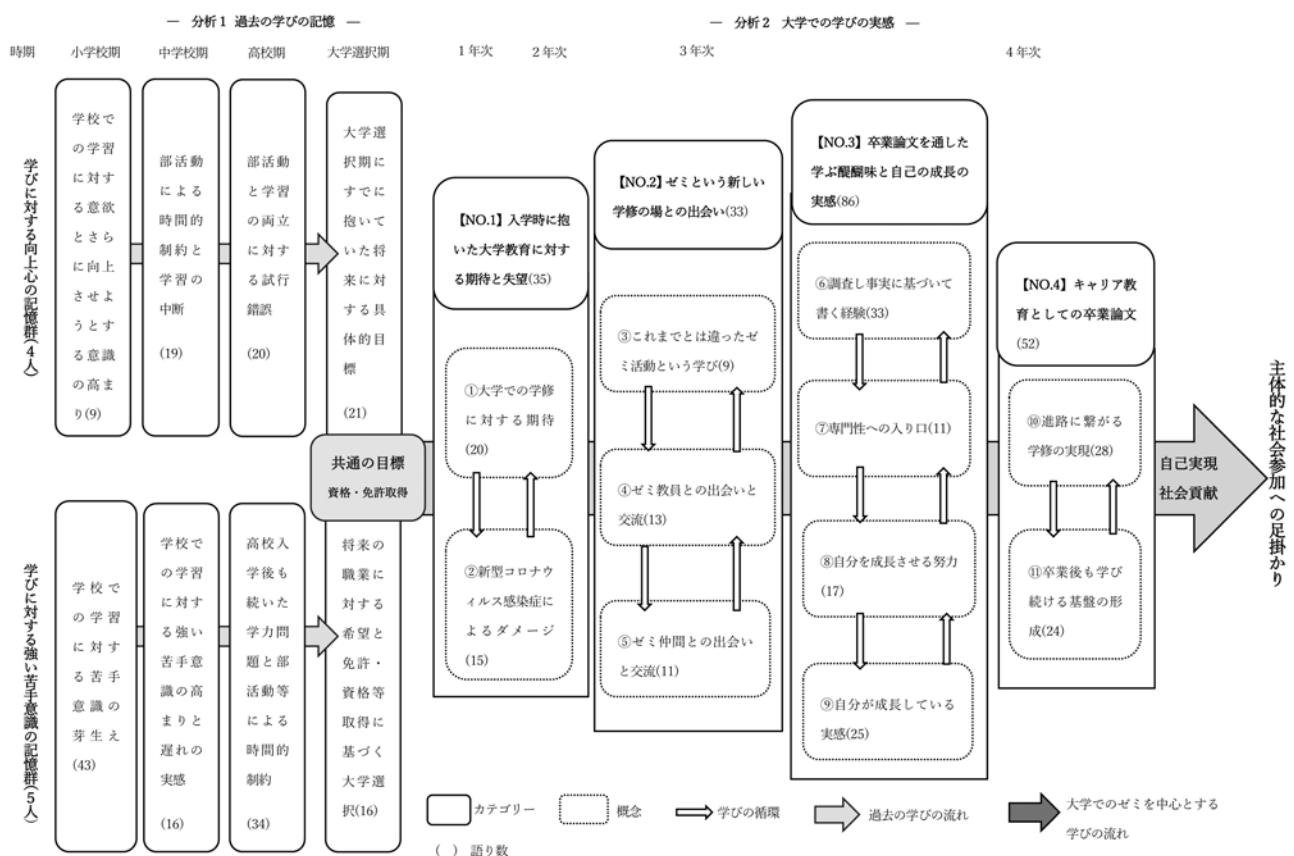


図1 概念図

6 考 察

(1) 過去の学習に対する意識

分析1の結果から、マージナル大学には「向上群」と「苦手群」の学生が混在していた。苦手群は、学校教育の初期段階から「わからなさ」を感じており、「最初は、たぶん小学校2年生の掛け算(表4:F)」という苦しい記憶が語られた。苦手群における小学校期の語り数は43と最多であり、多くは学習の「わからなさ」についての語りであった。この「わからなさ」に関する語りは、高校期まで継続し『高校入学後も続いた学力不振と部活動等による時間的制限(表4:NO.3)』が生成された。向上群では、学習意欲は高いものの「(勉強が)出来る方って思っていたんですけど、部活で、朝練もあるし(表4:E)」など、学習継続の中断が語られた。だが、向上群は一定の学習意欲や理解が根底にあることから、再び学習に取り組んでいた。これらのことから、マージナル大

学には様々な学生が学んでおり、背景や時期に違いはあるものの、何らかの学習のつまずきを経験していることが明らかになった。

葛城⁹⁾は、マージナル大学には学修が極めて難しい学生から比較的優秀な学生まで幅広く学んでいるとし、個別のニーズに応じた大学教育の重要性を強調している。芹沢⁴³⁾は、「彼らは『教育の犠牲者』ではないか。レベルが低いのではなく、大学に入るまでの教育のレベルが低いことの表れという視点」を強調している。現在、小中学校等では、養育環境を中心とする教育格差、一斉授業で理解しきれない等の理由から、結果的に学力不振児が生じてしまう現実がある²⁰⁾。この子ども達が意欲を低下させたまま、比較的入学しやすいマージナル大学に入学した可能性が考えられた。

マージナル大学は、まずはこうした学生の経緯に理解を示し、一人一人の実態に合わせた丁寧な指導に取り組むことが重要と考えられた。

(2) 卒業論文を中心とするゼミ活動の教育効果とその要件

調査協力者からは「自分から学ぶことっていいな、と思いました。なんか楽しかった。成長しているなっと思いました(表5-(2):G)」などわかる喜びが語られ、『卒業論文を通した学ぶ醍醐味と自己の成長の実感』が生成された。さらにキャリア教育の視点から、「働いた後も自分から動かないと何も得られない(B)」、「これから学び続けなきゃいけない(G)」、「土台を作れた(J)」など、就労後を見通した向上心も語られた。このことから、卒業論文を中心とするゼミ活動における教育効果は、「過去のつまずきから将来に視点の転換を促し、自ら行動し成長しようとする学びの実行と、これを就労後も継続しようとする意識の向上」と考えられた。

保育士と教員の養成に取り組むA大学では、資格や免許取得という目標が明確化されやすい素地があった。これを足掛かりに、ゼミでは学外での調査活動を積極的に報告しあうなど、集団で共有しやすい風土が形成されていた。結果、『ゼミという新たな学修の場との出会い(表5-(1) NO.2)』が生成された。森下²⁸⁾は、「(学びの)評価は個人のものだけでなく、集団にプラスに受け止められるときに大きな意味をもってくる」と述べ、個と集団との相互関係の重要性を指摘している。他者との共有と協働が実現できるゼミの風土形成は、教育効果の要件と考えられた。

また、自らのキャリア形成と繋がり深い卒業論文テーマ設定は、就労後を視野に自らを成長させようとする姿勢と社会貢献の視点を引き出す重要な要件であった。現在、保育や教育現場では学び続ける人材が求められている¹⁸⁾。卒業論文を社会への足掛かりと捉えることは、意義あることと考えられた。マージナル大学では、多様化する学生の主体性を引き出す模索が続いている^{35) 37)}。特に、キャリア教育の視点での取り組みは重要と考えられた。

さらに、個々の学生の学びに歩調を合わせるゼミ教員の存在も不可欠であった。野中³¹⁾は、マージナル大学での教育について①自ら経験した教育環境を

一旦捨て、②居場所となる保護的空間を作り、③異質な他者に触れる機会を確保の3点を重視し、これを実践する教員の役割を強調している。居神⁷⁾も、「マージナル大学の教員は、研究者としての実存にこだわることなく、学生の分からなさにとことんまで付き合うべき」としている。学生と信頼関係を構築しやすい距離にあり、将来を念頭に個別対応で指導するゼミ教員は、重要な要件と考えられた。

学ぶことに前向きとなった学生は、これで学力問題がすべて改善されたわけではないが、就労後も主体的学びを継続する基盤形成が図られていた。これは、過去につまずきがある学生を再び学びに導き、社会に人材を輩出するマージナル大学の重要な役割のひとつと考えられた¹⁹⁾。

本研究は調査対象が少人数であり、知見の一般化には制限がある。本来、教育の効果とは早急に判断は出来ず、その後の経過を待たなければならない。また、マージナル大学の多様化には、学力不振だけでなく見過ごされてきた境界知能など、発達上の困難が含まれる可能性がある^{2) 6) 21)}。マージナル大学における実態と学びの更なる検討は、本研究の課題である。

謝辞

調査協力者9名の学生に心より感謝いたします。これからの御活躍をいつまでも応援しています。

文献

- 1) 荒木淳子・伊達洋駆・松下慶太(2015): キャリア教育論－仕事・遊び・コミュニティ。慶応義塾大学出版会。
- 2) 榎本博明(2024): 「指示通り」ができない人たち。日経プレミアシリーズ。
- 3) 濱中淳子(2025): 大学でどう学ぶか。ちくまプリマー新書。
- 4) 濱中淳子・葛城浩一(2024): 〈学ぶ学生〉の実像－大学教育の条件は何か－。勁草書房。
- 5) 東谷譲(2007): 大学での学び方「思考」のレッスン。勁草書房。

- 6) 本田秀夫 (2024): 知的障害と発達障害の子どもたち. SB新書.
- 7) 居神浩 (2015): ノンエリートのためのキャリア教育論－適応と抵抗そして承認と参加－法律文化社.
- 8) 居神浩 (2018): 学生の多様化を正面から見ない大学論への絶望と希望. 高等教育研究, 第21集, 127－145.
- 9) 葛城浩一 (2023): 大学教員とは何者なのか－ボーダーフリー大学教員に着目して－. 大学評価研究, 第22号, 31－39.
- 10) 川岸克己 (2021): 卒業論文の意義と指導. 安田女子大学紀要, 49巻, 137－146.
- 11) 菊地美由紀 (2024): 大学生の就職に対する「異質」なネットワークの効果. 九州大学教育社会学研究集録, 28, 15－26.
- 12) 木下康仁 (2003): グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－. 弘文堂.
- 13) 木下康仁 (2020): 定本M-GTA実践の理論家をめざす質的研究方法論. 医学書院.
- 14) 児玉恵美 (2013): 卒業論文作成における教育的意義－学生の自尊感情と教員による期待－. 応用障害心理学研究, 第12号, 13－26.
- 15) 近藤真理子 (2021): 大学における「特別支援教育」の意義と展望－インクルーシブな学びの可能性. 日本の科学者, Vol. 56, No. 6, 18－23.
- 16) 小杉礼子 (2008): 大学生の進路選択と就職活動. 高等教育研究, 第11集, 85－104.
- 17) 久保田賢一 (監修)・山本良太・岩崎千晶・岸磨貴子 (2020): 大学のゼミから広がるキャリア－構成主義に基づく「自分探し」の学習環境デザイン－. 北大路書房.
- 18) 前田康裕 (2016): まんがで知る教師の学び－これからの学校教育を担うために－. さくら社.
- 19) 増谷文生 (2025): 時を読む「大学が多すぎる」が見落とす価値. 朝日新聞, 2025年8月25日報道.
- 20) 松岡亮二 (2025): 選べない「生まれ」学歴や所得に差. 朝日新聞, 2025年3月20日報道.
- 21) 宮口幸治 (2023): 境界知能の人が見ている世界. 扶桑社.
- 22) 文部科学省 (2024): 文部科学統計要覧 (令和6年度版).
- 23) 文部科学省 (2024): 学校基本調査 (令和6年度版).
- 24) 文部科学省中央教育審議会 (2008): 学士課程教育の構築に向けて.
- 25) 文部科学省中央教育審議会 (2012): 新たな未来を築くための大学教育の質的転換.
- 26) 文部科学省中央教育審議会 (2018): 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン.
- 27) 文部科学省高大接続システム改革会議 (2016): 高大接続システム改革会議「最終報告」.
- 28) 森下芳郎 (1993): すべての青年に青春を－青年期教育試論－. 全国障害者問題研究会茨城支部, 86－88.
- 29) 日本私立学校振興・共済事業団 (2024): 令和6 (2024) 年度私立大学・短期大学等入学志願動向.
- 30) 西野毅朗 (2022): 日本のゼミナール教育－人文・社会科学領域等の学士課程教育における学習共同体の姿－. 玉川大学出版部.
- 31) 野中浩一 (2014): ユニバーサル化時代における大学の意義－異質性が高める学生の共生力－. 和光大学現代人間学部紀要, 第7号, 177－194.
- 32) 篠田雅人・日下田岳史 (2014): 人文科学系学科における卒業論文の意味するもの－学科における現状認識と, 操作変数法による執筆効果の推定から－. 大学経営政策研究, 第4号, 55－71.
- 33) 曾桶元隆 (1996): 卒業論文作成教育について. 工学教育, 44巻1号, 19－23.
- 34) 高田里恵子 (2017): 大学は小学校ではない, か?. 人間文化研究, 第6巻, 241－260.
- 35) 田中秀和 (2021): キャンパスソーシャルワーカーの必要性を考える－マージナル大学に関する議論を手がかりとして－. 立正社会福祉研究, 第23巻, 173－181.
- 36) 藁谷友紀 (2002): 卒論・ゼミ論の書き方第2版. 早稲田大学出版部.
- 37) 山本和美 (2022): 発達障害のグレーゾーンに位置する学生への大学におけるキャリアカウンセラーの支援プロセス. 山梨大学教育学部紀要, 第33号, 321－335.
- 38) 矢野眞和 (2007): 大学は本人のためだけでなく, 社会のために役立っている. 日本労働研究, No. 561, 59－61.
- 39) 矢野眞和 (2023): 今に生きる学生時代の学びとは－卒業生調査にみる大学教育の効果－. 玉川大学出版部.
- 40) 読売新聞教育ネットワーク事務局 (2019): 大学の

実力2019. 中央公論新社, 25 - 31.

41) 吉田文・濱中淳子・渡邊浩一 (2025): 専門書を読む - 教員と学生でつくる10講座 -. ミネルヴァ書房.

42) 芳沢光男 (2019): 「%」がわからない大学生 - 日本の数学教育の致命的欠陥 -. 光文社新書.

43) 芳沢光男 (2025): 大学で四則演算? 「応用力には必要」数学の基礎も教える. 朝日新聞, 2025年7月15日報道.

44) 財務省制度等審議会 (2025): 激動の世界を見据えたあるべき財政運営. 24 - 28.

(おおた ひでき)

【受理日 2025年11月19日】